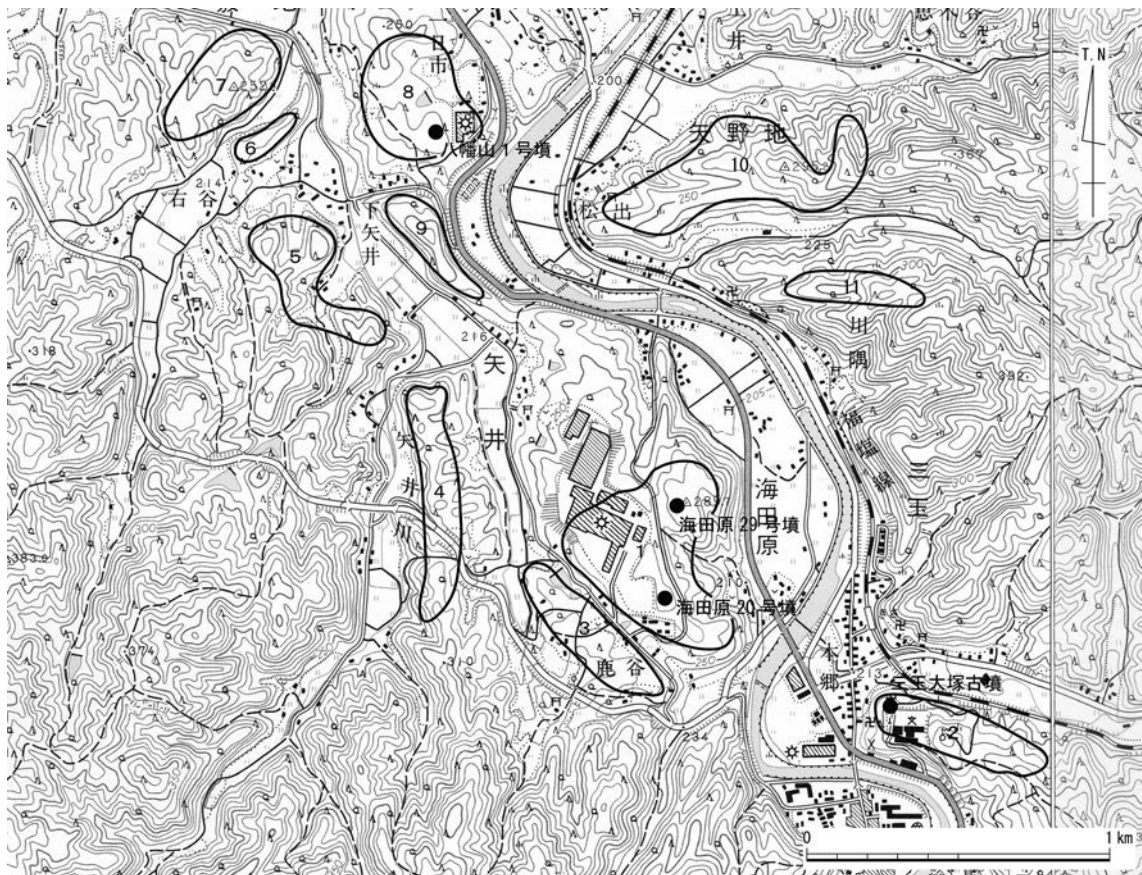


三次市吉舎町海田原29号墳の測量調査

平尾 英希・池西美咲・貝原賢哉・香坂 亮・平本直幹
 福地祥平・福元隆希・向井涼平・渡邊直宝

1. はじめに

海田原古墳群は広島県三次市吉舎町矢井海田原に位置する（第1図）。海田原29号墳は海田原古墳群で確認されている3基の帆立貝形古墳のうちの一つである。2013年に広島大学文学部考古学専攻22年度生によって測量調査が行われた20号墳より規模は小さいとされていたものの、未調査のため墳丘に関する詳細な情報が得られていなかった。そこで、精確な墳丘測量図を作成し、海田原古墳群及び馬洗川上流域の帆立貝形古墳についてより理解を深めるために、2015年3月下旬から4月初旬にかけて、広島大学文学部考古学専攻24年度生の測量実習（野外考古学実習C）として、本古墳の測量調査を行った⁽¹⁾。以下、その調査経過と測量成果を報告する。（池西）



第1図 海田原29号墳周辺古墳分布図 (1/25000)

1. 海田原古墳群 2. 三玉古墳群 3. 上矢井東古墳群 4. 矢井西古墳群 5. 下矢井南古墳群
 6. 下矢井北古墳群 7. 明神山古墳群 8. 八幡山古墳群 9. 中山古墳群 10. 矢の地古墳群
 11. 矢の地南古墳群

2. 地理的・歴史的環境及び海田原古墳群の概要

(1) 地理的環境

三次盆地⁽²⁾は衝上断層の作用によって形成された窪地に河川の侵食と堆積が加わることで形成された盆地で、北側には標高400m前後の山々が連なり、南側には標高200m前後の丘陵地帯が広がっている(卯山 2004)。盆地中央には馬洗川が東西に貫流しており、盆地東部で上下川、美波羅川、国兼川と合流し、盆地西部で可愛川と西城川と合流して江の川本流となる。河川に沿うように狭い河岸段丘が形成され、おもに河川が合流する付近に比較的広い平地部が形成されているが、各平地部は丘陵によって分断されている。

海田原古墳群は盆地東南部を蛇行しながら北流する馬洗川左岸の丘陵上に分布しており、29号墳は古墳群が分布する丘陵上の最高所に築造されている。

(2) 歴史的環境

三次地域には古墳時代を通じて約4000基の古墳が築造されており、古墳が集中する地域として全国的にも有名である。また、中期以降に帆立貝形古墳が多数築造された地域でもあり、当地域の古墳文化を特徴づけるものとして注目される(桑原 2004・2006、古瀬 1987・1992)。

現在、前期前半に遡る古墳は確認されていないが、前期に遡る可能性がある古墳に岩脇古墳(潮見 1974)、若宮古墳(藤井ほか 2014)、四拾貫太郎丸古墳(木村 1961)、四拾貫9号墳(潮見 1974)、宮の本24号墳(梅本 2013)などがある。若宮古墳が前方後円墳であるほかはいずれも円墳である。

中期になると古墳の築造数が急増し、その前半には全長20～30mの帆立貝形古墳や円墳を中心として古墳群を形成するようになる。この時期の古墳群には善法寺古墳群(潮見 1974)や大久保古墳群(加藤ほか 1979)、四拾貫小原古墳群(潮見 1969)、鞍ヶ谷北古墳群(加藤ほか 1979)、川西古墳群(潮見 1974)などがある。中期後半になると上四拾貫古墳群(金井ほか 1978)や七ツ塚古墳群(植田 2003)などにおいて直径20m未満の小形古墳の築造がさらに進む一方で、緑岩古墳(桑田 1983)や上大縄古墳(松村ほか 1989)のように単独で立地する古墳も築造される。また、三次盆地では中期中頃から全長40mを超える大形帆立貝形古墳が築造され始め、糸井大塚古墳(桑原 1986)や三玉大塚古墳(桑原ほか 1983)、酒屋高塚古墳(青山 1983)などの首長墳が築造される。

しかし、後期になると大形帆立貝形古墳が築造されなくなり、勇免4号墳(潮見 1974)や久々原6号墳(古瀬 1977)などのように、10～20mの小規模な前方後円墳を中心に構成される古墳群が造営されるようになる。また、当地域において最初に横穴式石室が導入されるのは6世紀中葉の若屋9号墳(松崎・潮見 1961)であるが、その普及は6世紀後半になってからである。

(3) 海田原古墳群の概要

海田原古墳群は、帆立貝形古墳3基と円墳30基の計33基の古墳によって構成される古墳群である⁽³⁾。20号墳と21号墳、29号墳の3基が帆立貝形古墳であるが、21号墳は墳丘の大部分が削平されており、現在は20号墳と29号墳が存在するのみとなっている。30基の円墳は直径

約5～14.5mのものが存在しており、墳丘規模に若干の差異があるものの、ほとんどが小規模な円墳である。これまで海田原古墳群の測量調査や発掘調査は行われていなかったが、2013年に広島大学文学部考古学専攻22年度生によって20号墳の測量調査が実施され、精確な墳丘測量図が作成された（村田ほか 2014）。

また、海田原古墳群の北西約1.5kmの丘陵上には八幡山1号墳、南東約1.2kmの丘陵上には三玉大塚古墳が存在する。海田原20号墳と29号墳はその墳丘規模から八幡山1号墳と三玉大塚古墳とともに当該地域の首長墳と考えられる。（平尾）

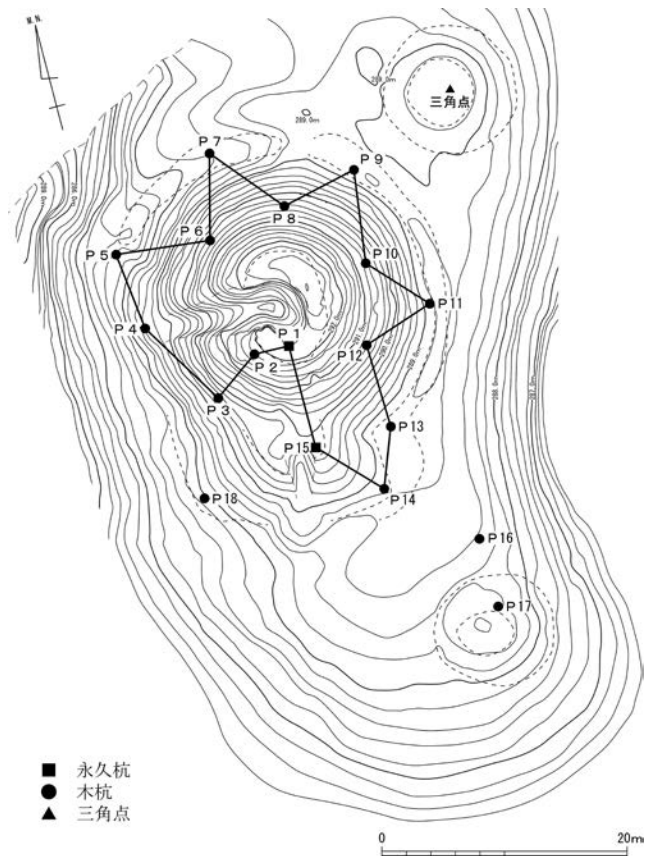
3. 調査方法と日程

(1) 調査方法

測量図の作成は閉合トラバースを用いた平板測量によって行った。トラバースを設定する際にはNIKON製のトランシットNE-20LCと、TOPCON製のトータルステーションCS-101Fを使用した。また、直接水準測量および平板測量の際にはTOPCON製のオートレベルAT-G1、SOKKIA製のオートレベルC310、NIKON製のオートレベルAC-2Sを使用していたが、途中NIKON製のレベルが故障していることがわかったため、NIKON製のティルティングレベルE5に換えて測量調査を継続した。

トラバースの設定 閉合トラバースの設定にあたり、円丘部⁽⁴⁾頂と方丘部頂の永久杭（P1・

P15）を含めて計15本の杭を設置し（第2図）、各側線の斜距離と各測点の内角を測定した。方位角の測定にはSUUNTO製のコンパスKB-14/360Rをトランシットに取り付け、P1の方位角を測定し、測角を行った。また、調査途中で29号墳の南東に隣接する30号墳と墳丘南西の周辺地形を測量するために、開放トラバースで3本の杭（P16・P17・P18）を設置した。なお、北東に隣接する28号墳の測量に関しては、国土地理院が設置した四等三角点（基準点コードTR45232077801、「K地（16）海田原」（平成19年9月7日）037849、緯度344352.2873、経度1325903.3988、X座標-140452.487、Y座標74874.869）を使用した。P16・P17はP15を後視点、P14を機械点とし、P18はP15を後視点、P3を機械点として設置した。そのた



第2図 測量杭配置図 (1/600)

め、本調査で使用した杭は合計で18本となった。

水準測量 標高の設定は上述した四等三角点（標高289.55m）を基準とし、直接水準測量によって行った。基準点からP1への往路で比高差+2.774m、復路で-2.769mとなり、誤差が5mmとなった。許容範囲内であったため、往路と復路の平均値2.772mを採用し、P1の標高を292.322mに設定した。

トラバース計算 現地での測定値をもとに計算し、誤差の配分については以下のように行った。内角は総和が+40秒であったため、角度の大きい測点（P1・P6・P8・P12）から10秒ずつ減じた。径距・緯距の誤差に関しては、径距が+1cm、緯距が-1cmであったため、それぞれ絶対値が最大の側線（径距は側線5-6、緯距は側線15-1）に誤差配分して調整を行った。

紙割り 上記の誤差配分の結果算出した杭の座標を方眼紙上に100分の1の縮尺で落としした。測量は円丘部側と方丘部側の2班に別れて行うため、くびれ部周辺のP1・P2・P3・P11・P12を共有させて、2枚のマイラーシートに分けて杭の位置を写しとった。また、調査途中で28号墳と30号墳の測量図をそれぞれ別に作成することとなったため、28号墳はP1・P8・P9・P10・P11・P12を、30号墳はP13・P14・P15を共有させてマイラーシートに杭の位置を写しとった。

平板測量 測量は基本的に2台の平板を用いて行ったが、調査終盤には円丘部側、方丘部側と円墳2基の測量のため3台で行った。測量をする際には、縮尺の度合いが大きいことと、落ち葉や下草によってレベルの読み値が容易に変化することを考慮して、円丘部頂部では±5mm、墳丘斜面や墳裾周辺は±1cm、周辺地形は±3cmを許容範囲とした。等高線の記入は等高線間隔を20cmとし、100分の1の縮尺で平板測量図を作成した。

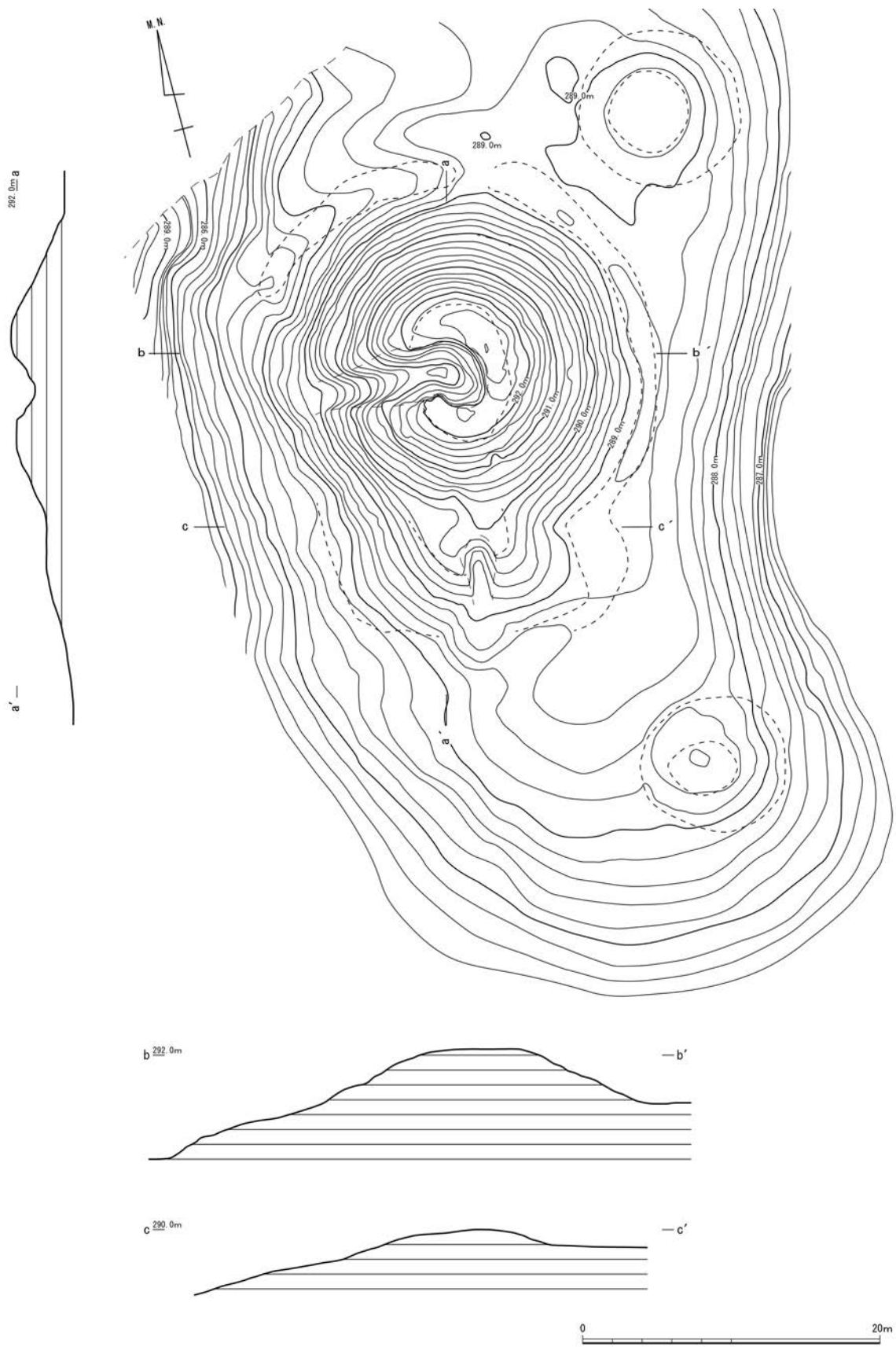
（2）調査日程

調査は3月24・25・28～31日、4月2・7・8日の計9日間実施した。24日に立木の伐採と杭の設置、標高の設定などを行い、25日に各測点の内角を測定した。28日から平板測量を開始したが、30日にオートレベルの不具合によって各杭の標高差が正しく計測できていないことが発覚したため、再計測をし、31日に新たに設定し直した標高を使って測量を再開した。4月8日に全ての作業を終了し、永久杭2本（P1・P15）を残して撤収した。

4. 測量調査の成果

（1）海田原29号墳の墳丘形態と規模（第3図）

円丘部 円丘部頂は東側が一部崩れており、西側も盗掘坑によって破壊されているため、現状は若干南北に長い楕円形を呈しているが、北側や南側の遺存状態が良い部分をもとにすると、直径約7.7mの正円に近い平坦面が復元できる。また、現在はテラス面を明瞭に観察することはできないが、墳形が良好に遺存している北から北東斜面をみると、標高289.80～290.20m付近に等高線の間隔が広がる箇所が確認される。さらにこの等高線を辿っていくと方丘部頂につながるため、標高289.80～290.20m付近にテラスを有する二段築成であった



第3图 海田原29号墳丘測量图 (1/400)

と考えられる。墳裾は、墳丘東半分で標高289.00m付近、西半分では盗掘時の排土によって等高線に一部乱れが生じているものの、標高287.60m付近に求めることができる。円丘部北西から東側のくびれ部にかけて、幅約1～2.5m、深さが最大で約20cmの周溝が巡っているが、方丘部と円丘部西側では明瞭に観察できない。葺石は確認されており詳細は不明である。なお、盗掘坑内の枯葉などを除去、清掃し、須恵器片17点を表採した。

方丘部 方丘部頂は南側斜面の攪乱坑によって等高線に乱れが生じているが、円丘部との接続部から南に向かって緩く傾斜している。全体としては、くびれ部から先端

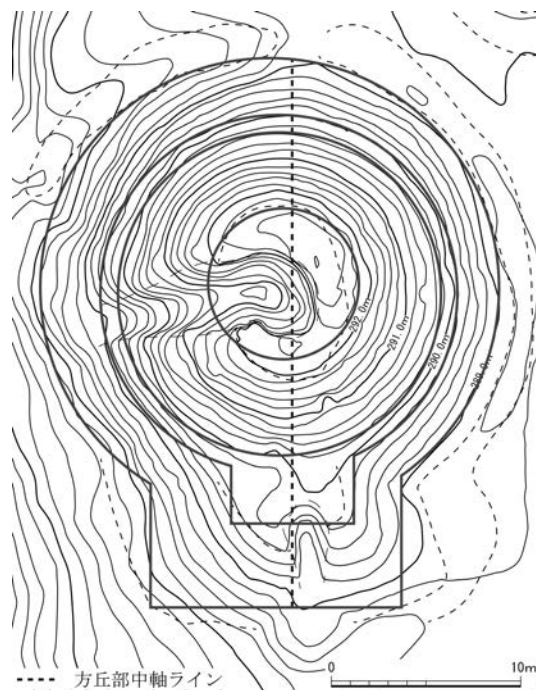
に向けてほとんど広がらず、短く幅の広い形を呈している。墳裾は東側が明瞭に遺存しており標高289.00mに求めることができる。西側では周辺に盛土が流れているものの、等高線に著しい乱れが認められないことから、現状ではくびれ部の形状を若干残す標高288.00～288.20m付近に想定される。段築や外表施設は確認されていない。また、方丘部頂と西側斜面から須恵器片2点を表採した。

墳丘規模 海田原29号墳の墳丘規模は、現状で墳長約29.0m、円丘部は推定直径約24.0m、墳頂平坦面の推定直径約7.7m、高さは東側で約3.6m、西側で約5.1m、方丘部は長さ約7.0m、推定幅約13.4m、高さ約1.0mと考えられる。円丘部頂最高点の標高は292.680mである。なお、墳丘主軸は北北東－南南西で、方位はおよそS-5°-Wとなる。

構築方法 本古墳は同古墳群内の20号墳と同様に、丘陵頂部から少しずれた斜面に立地している。基底面は北東から南西方向へ緩やかに傾斜しており、墳丘主軸は尾根の方向を志向している。構築順序としては、段築の状況から方丘部を含む墳丘一段目を先に構築したのち、円丘部二段目を築いていると推測できる。これは同三次市内の三玉大塚古墳、酒屋高塚古墳、海田原20号墳と共通した構築方法であり、その過程で生じる円丘部二段目中心の「ずれ」は本古墳においても確認できる（村田ほか2014）。

（2）海田原28号墳及び30号墳の墳丘形態と規模

海田原29号墳に隣接して2基の円墳が築造されている。北東に位置する28号墳は直径約10.9m、高さ約0.8m、南東に位置する30号墳は直径約11.1m、高さ約0.8mである。いずれも埋葬施設に関しては未調査のため詳細は不明である。なお、現在28号墳の墳頂には四等三角点が設置されている。



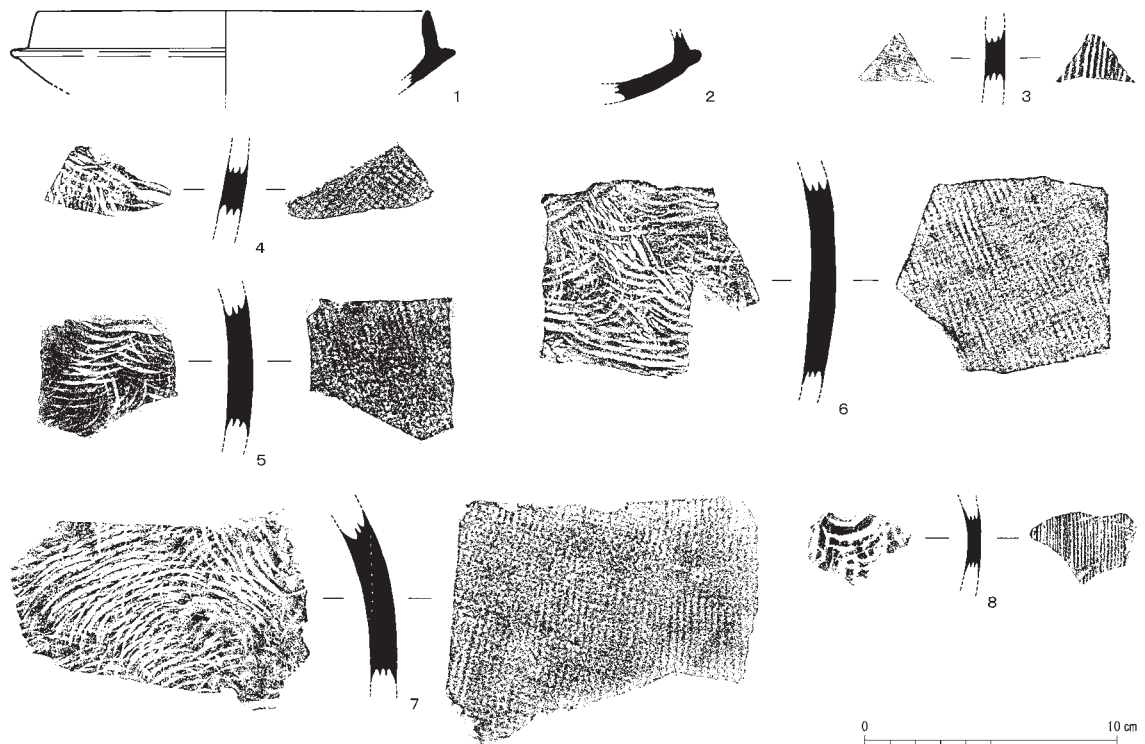
第4図 海田原29号墳墳丘復元図 (1/400)

(3) 遺物 (第5図1~8、図版4)

海田原29号墳の調査時に円丘部盗掘坑内から17点、方丘部から2点、古墳までの林道から1点、計20点の須恵器片を表採した。なお、2013年の海田原20号墳の調査時にも円丘部盗掘坑内から2点、古墳までの林道から2点、計4点の須恵器片を表採している。須恵器片には蓋坏と甕がみられるが、ここでは今回の調査時に表採した須恵器片のうち比較的遺存状態が良好な8点について報告する。

蓋坏 1・2ともに円丘部盗掘坑内で表採した坏身の口縁部片である。1は口縁部から受部にかけて残存しており、復元口径15.6cm、残存高3.0cmである。口縁部はやや内傾して上方にたちあがり、端部は丸く、受部は水平に短くのびる。内外面ともに横ナデが施されている。2は口縁部の大部分と受部が一部欠損しており、残存高2.65cmを測る。口縁部は内傾してたちあがり、受部は短く外上方にのび、端部は丸い。内外面に横ナデが施されている。なお、細片のため図示することができなかったが、円丘部盗掘坑内から口縁部を丸くおさめる坏蓋の口縁部片1点を表採している。

甕 3~5と8は円丘部盗掘坑内、6は方丘部西側斜面、7は方丘部頂で表採した甕片である。3は体部片で、残存高2.1cm、厚さ0.8cmを測る。内面にナデ調整、外面には平行叩目文が施されている。4も体部片で、残存高2.9cm、厚さ1.0cmを測る。内面には青海波文がみられ、外面には浅い格子叩目文が施されている。5も体部片で、残存高5.6cm、厚さ1.0cmを測り、内面には青海波文がみられ、外面には浅い格子叩目文が施されている。6も体部片で、残存高8.2cm、厚さ1.0cmを測るが、内面の一部が剥離している。内面には青海波文がみられ、外



第5図 表採土器 (1/3)

面に格子叩目文が施されている。7も体部片で、残存高7.1cm、厚さ1.2cmを測る。内面に青海波文がみられ、外面に格子叩目文が施されている。断面には粘土紐の接合部を観察することができる。8も体部片で、残存高3.0cm、厚さは0.5cmを測る。内面には青海波文がみられるが、上述のものよりかなり深く刻まれている。外面にはカキ目調整が施されている。器壁がやや薄く、調整などが他の甕片とは異なることから横瓶の可能性も考えられる。なお、5～7はいずれも外面に自然釉が付着している。(池西)

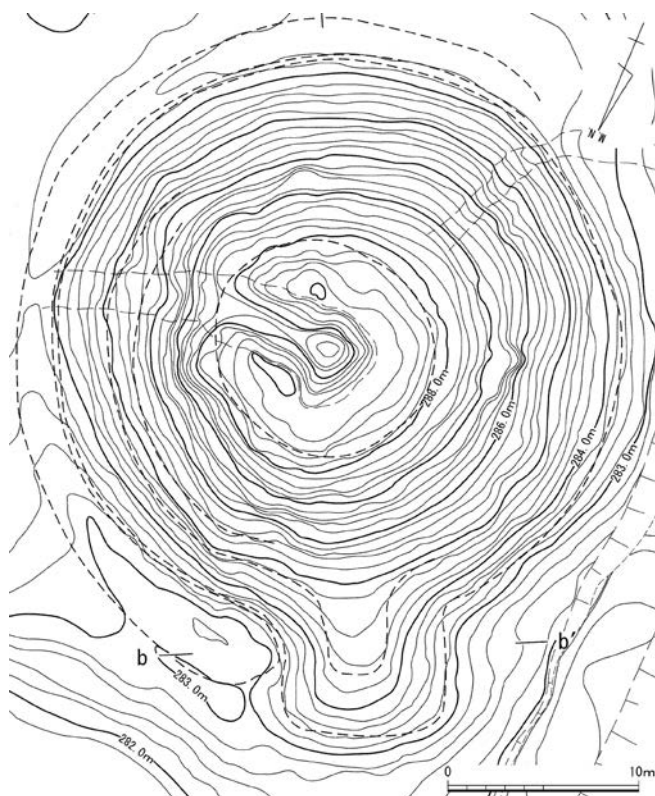
5. 考 察

(1) 築造時期

これまで海田原29号墳の築造時期は不明であったが、今回の調査時に多数の須恵器片を採集することができ、29号墳の築造時期を特定することが可能となった。ほとんどの須恵器片は円丘部の盗掘坑周辺で採集されたことから、盗掘の際に掘り出された遺物である可能性が高く、29号墳の時期を示す蓋然性が高い。採集できた須恵器片のなかに完形品はないものの、TK10型式からMT85型式の特徴をもつ須恵器片がみられることから、29号墳は6世紀第2四半期から第3四半期に築造されたと考えられる。

(2) 海田原29号墳の位置づけ

先述のように、海田原古墳群は3基の帆立貝形古墳と30基の円墳によって構成される。古墳のほとんどが小規模な円墳であるが、古墳群を理解するために3基の帆立貝形古墳の検討



第6図 海田原20号墳 (1/400)
(村田ほか 2014より一部改変)

は欠くことはできない。しかし、上述したように21号墳は現存しないため、ここでは20号墳と29号墳の比較、検討を行うことにする。また、海田原古墳群周辺の主要な帆立貝形古墳である八幡山1号墳(高田・山崎 1979)と三玉大塚古墳(桑原ほか 1983)との比較を行うことにより、馬洗川上流域における帆立貝形古墳の特性を明らかにし、海田原29号墳の位置づけを考えたい。

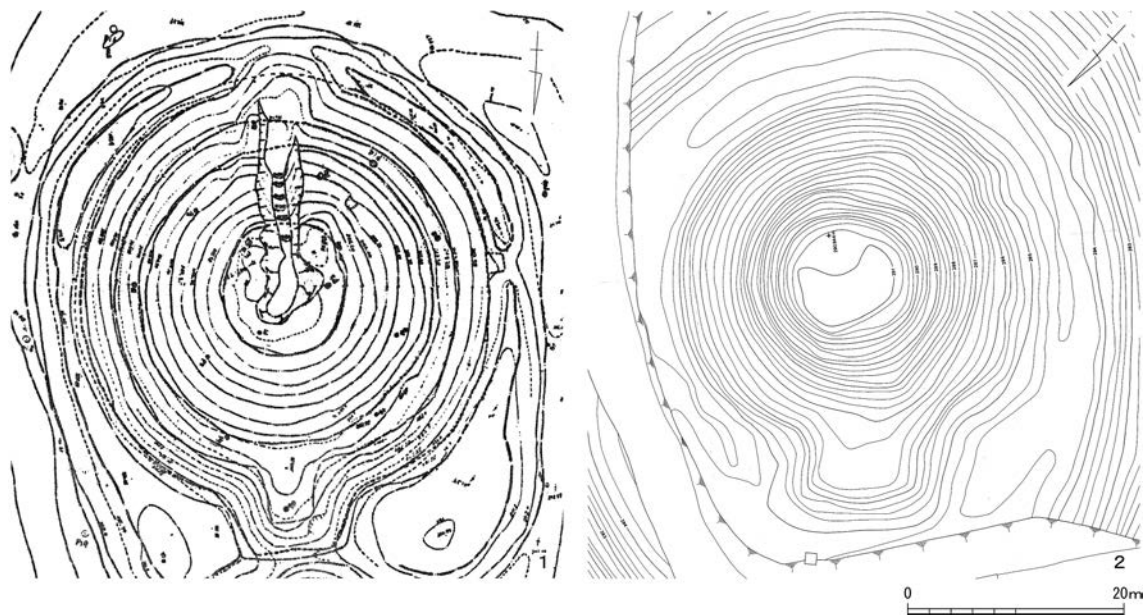
まず、20号墳と29号墳の墳丘形態や構造について比較する(第6図)。墳丘の全長は29号墳が20号墳より約7.0m小さい。ただし、円丘部直径に約6.0mの差があるのに対して、方丘部長は29号墳の

方が大きいことから、全長差の要因は円丘部の規模にあると考えられる。発掘調査が行われていない現状では確実なことがいえないものの、墳丘構造は20号墳、29号墳ともに二段築成と考えられ、いずれも方丘部を含む墳丘一段目を構築したのちに円丘部二段目を構築したものと推測できる。20号墳において村田晋氏が指摘する円丘部二段目の「ずれ」(村田ほか2014)が29号墳でもみられることはこれを傍証するものであろう。つまり、20号墳と29号墳は墳丘の規模と方丘部の比率において差異が存在するものの、墳丘の構築方法に類似性が認められ、在地系の墳丘構築技術を想定することが可能である。ただし、29号墳に関していえば、墳丘の主軸と方丘部頂の中軸に著しいずれが存在することを指摘できる。傾斜地に築造されていることから地形の制約を受けた可能性が考えられるものの、29号墳と20号墳の平面形態にはヒアタスが認められ、これは後述する築造時期の違いとも関係するであろう。

次に海田原古墳群に属する2基の帆立貝形古墳と周辺の主要な帆立貝形古墳である八幡山1号墳と三玉大塚古墳との比較を行う。これまでに馬洗川上流域の帆立貝形古墳において築造時期が判明していたのは三玉大塚古墳のみであった。しかし、今回の調査時に表採された須恵器片から海田原29号墳の築造時期は6世紀第2四半期から第3四半期となり、前者から後者への築造順を想定できるようになった。しかし、海田原20号墳と八幡山1号墳に関して

第1表 馬洗川上流域における主要帆立貝形古墳の墳丘各部比率

	円丘部径 (m)	方形部長 (m)	方形部幅 (m)	円丘部高 (m)	方形部高 (m)	方形部長 /円丘部径	方形部幅 /円丘部径	方形部高 /円丘部高
八幡山1号墳	40	5	10	6	1.5	0.125	0.25	0.25
海田原20号墳	30	6	9	5.5	1.5	0.2	0.3	0.273
三玉大塚古墳	33.3	8.8	15	7.9	2.2	0.264	0.45	0.278
海田原29号墳	24	7	13.4	3.6	1	0.292	0.558	0.278



第7図 馬洗川上流域における主要帆立貝形古墳 (1/700)

1. 八幡山1号墳 (高田・山崎 1979より一部改変) 2. 三玉大塚古墳 (桑原ほか 1983より一部改変)

はその築造時期を特定する資料が乏しいため、ここでは墳丘形態の型式学的検討によって築造時期を考察したい。

墳丘各部⁽⁵⁾の比率をみると(第1表、第7図)、円丘部径に対する方丘部長、方丘部幅、円丘部高に対する方丘部高の変化から、八幡山1号墳、海田原20号墳、三玉大塚古墳、海田原29号墳の順番で型式組列を組むことができ⁽⁶⁾、八幡山1号墳、海田原20号墳、三玉大塚古墳、海田原29号墳の築造順を想定できる。墳丘各部の比率から馬洗川上流域における帆立貝形古墳の方丘部は築造時期が下るにつれて相対的に拡大化していく傾向にあるといえよう。詳細な検討が必要であるが、このような傾向は前方後円墳における前方部の拡大化傾向と連動するものと考えられる。備後北部における古墳時代後期の前方後円墳をみると、矢崎古墳のように前方部幅が後円部径を超える前方後円墳も存在する(高橋 1986)。これまでの帆立貝形古墳の評価として中央政権からの規制を考える研究(小野山 1970)があるが、馬洗川上流域の帆立貝形古墳において前方後円墳と同じような墳丘形態の変化を示していることは注目できる。おもに5世紀の帆立貝形古墳の築造において何らかの規制があったことを想定するならば、時期が下るにつれてその規制が弱くなったかなくなった可能性も考えられよう。

以上のことから、海田原29号墳は馬洗川上流域における帆立貝形古墳のなかでも築造時期が下る首長墳として評価でき、検討しなければならない課題も多く残るものの、帆立貝形古墳の築造に対する規制が弱くなった古墳として理解できるかもしれない。

6. おわりに

今回の測量調査によって海田原29号墳と28号墳、30号墳の精確な墳丘測量図を作成することができた。その結果、29号墳は全長約29.0m、円丘部径約24.0m、円丘部高約3.6m、方丘部長約7.0m、方丘部幅約13.4m、方丘部高約1.0mの帆立貝形古墳と考えられる。また、29号墳と20号墳の墳丘構造に類似性が認められることから、29号墳は20号墳と同様な構築技術によって構築されていることを想定した。そして、周辺の主要な帆立貝形古墳と墳丘形態を比較することで、時期が下るにつれて方丘部が拡大化していく傾向にあることを指摘し、海田原29号墳が馬洗川上流域における帆立貝形古墳でも時期の下る首長墳であると考えた。(平尾)

測量調査にあたり、三次市教育委員会の西岡信治氏と友廣美和氏には測量調査に必要な手続きをはじめ、様々な点でお世話になりました。また、沖原真道氏をはじめとするカイハラ産業(株)吉舎工場の皆様には工場内の施設の使用を快諾いただきました。なお、古瀬清秀名誉教授、野島永教授には調査現場までご引率、ご指導いただき、測量調査の計画当初から本報告の執筆にいたるまで多くのご教示をいただきました。記して感謝いたします。

註

- (1) 学部3年生の池西美咲・貝原賢哉・香坂亮・平本直幹・福地祥平・福元隆希・向井涼平・渡邊直宝が中心となって測量調査を行い、大学院生の市川伯博・平尾英希がこれを補助した。

- (2) ここでの三次盆地は旧双三郡において河川沿いに形成された平地部を意味する言葉として使用する。
- (3) なお、古墳群の分布調査によって古墳の番号が変更されたことが指摘されており（村田ほか 2014）、旧海田原4号墳は20号墳に、旧海田原24号墳は29号墳に対応することが判明した。
- (4) ここでは基本的に昨年の研究報告（村田ほか 2014）を踏襲し、墳丘各部に関する名称として「円丘部」を用いることにする。ただし、「方形部」については円丘部に対応させて「方丘部」と呼称する。
- (5) 墳丘各部の正確な数値を知り得るのは発掘調査が行われている三玉大塚古墳のみであり、そのほかの古墳に関しても墳丘の残存状況を考慮する必要があるが、おおよその傾向を知ることはできるであろう。
- (6) ただし、時期が下るにつれて円丘部二段目が高くなる傾向（村田ほか 2014）を29号墳において認めることはできない。これは円丘部二段目の高さが円丘部一段目の規模に大きく影響を受けたためと考えられる。

引用・参考文献

- 青山 透編 1983 『酒屋高塚古墳』広島県教育委員会。
- 植田千佳穂 2003 「史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群測量調査報告」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第4集、広島県立歴史民俗資料館、24～47頁。
- 梅本健治編 2013 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』29、広島県教育事業団。
- 卯山善章 2004 「三次盆地の成り立ち」『三次市史』I、自然環境編、三次市、2～11頁。
- 小野山節 1970 「5世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第3号、考古学研究会、73～83頁。
- 加藤光臣ほか編 1979 『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）』広島県教育委員会。
- 金井亀喜ほか編 1978 『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（1）』広島県教育委員会。
- 木村豪章 1961 「備後三次市太郎丸古墳調査報告」『古代吉備』第4集、古代吉備研究会、10～20頁。
- 桑田俊明編 1983 『緑岩古墳—三次地区工業団地第2期造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査—』広島県教育委員会。
- 桑原隆博 1986 「三次地域における古墳の様相（1）—糸井大塚古墳—」『芸備』第16集、芸備友の会、27～32頁。
- 桑原隆博 1991 「海田原古墳群」『探訪・広島古墳』双葉印刷、140～141頁。
- 桑原隆博 2004 「古墳時代」『三次市史』I、原始・古代編、三次市、206～290頁。
- 桑原隆博 2006 「三次地域の帆立貝形（式）古墳」『芸備』第33集、38～55頁。
- 桑原隆博ほか 1983 『三玉大塚古墳』広島県埋蔵文化財調査センター。
- 潮見 浩編 1969 『四拾貫小原』四拾貫小原発掘調査団。
- 潮見 浩監修 1974 『広島県双三郡・三次市史料総覧』第五篇、広島県双三郡・三次市史料総覧刊行会。
- 高田明人・山崎やよい 1979 「おむすびと豆たたき—双三郡吉舎町八幡山古墳測量雑感—」『続トレンチ』第3巻第1号、続トレンチ編集委員会、31～42頁。
- 高橋彰子 1986 「庄原市矢崎古墳測量実習略報」『続トレンチ』第6巻第4号、続トレンチ編集委員会、1～12頁。
- 広島県教育委員会 2002 『広島県遺跡地図』Ⅷ、広島県教育委員会。
- 古瀬清秀 1977 「久々原第1号古墳～久々原第9号古墳」『日本考古学年報』28、日本考古学協会、241頁。
- 古瀬清秀 1987 「備後の古墳」『吉備の考古学』福武書店、285～303頁。
- 古瀬清秀 1992 「古墳時代における備後北部の特質—特に三次盆地を中心に—」『吉備の考古学的研究』下巻、山陽新聞社、183～206頁。
- 藤井翔平ほか 2014 「県史跡 若宮古墳の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第6号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、87～102頁。

- 松崎寿和・潮見 浩 1961 「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第一巻、広島市役所、114～224頁。
- 松村昌彦・佐々木美和 1989 『上大縄古墳・下の割遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第78集、広島県埋蔵文化財調査センター。
- 村田 晋ほか 2014 「三次市吉舎町海田原20号墳の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第6号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、103～115頁。

Topographic Survey of the Kaidahara Tumulus No. 29 in Kisa, Miyoshi City

**Hideki HIRAO, Misaki IKENISHI, Kenya KAIHARA, Ryo KOSAKA, Naoki HIRAMOTO,
Shohei FUKUCHI, Ryuki FUKUMOTO, Ryohei MUKAI, Naotaka WATANABE**

The Kaidahara Tumulus No. 29 is a scallop-shaped burial mound located near the Kisacho area of Miyoshi City, Hiroshima prefecture. As part of field training for the twenty-fourth annual class of archaeology majors at the Hiroshima University School of Letters, we conducted a topographic survey of the area with the aim of creating a detailed survey map of this mound, and to clarify the ranking of Kaidahara tumulus No. 29. The results of this survey indicated that this tumulus is a scallop-shell kofun burial mound, 29 m in length and was constructed in the middle of the 6th century CE. Additionally, we proposed the hypothesis that this tumulus was constructed using the same mound-building techniques as in the case of the Kaidahara tumulus No. 20. Further, we discovered a trend in the scallop-shaped tumuli of the region upstream of the Basen River, whereby, over time, the size of square shaped mounds grew in relation to the round ones.

海田原29号墳

図版第 1



a. 墳丘全景（簡易オルソ画像、東から）



b. 墳丘全景（南西から）

海田原29号墳

図版第 2



a. 円丘部北側斜面（北から）



b. 円丘部西側斜面（西から）

海田原29号墳

図版第3



a. 方丘部（円丘部側から）



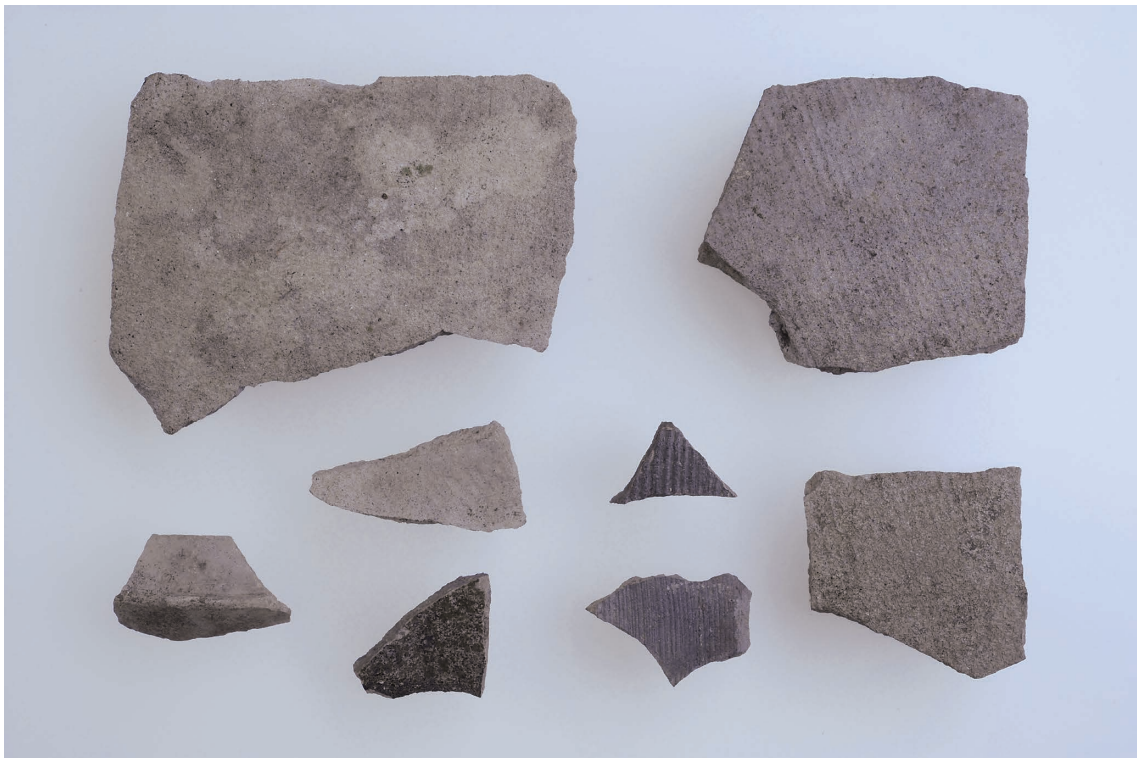
b. 方丘部（南から）

海田原29号墳

図版第 4



a. 円丘部墳頂盗掘坑（南東から）



b. 海田原29号墳表採須恵器